慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ニクソン政権によるラオス侵攻作戦の決定とその失敗、一九七〇–一九七一年
Sub Title	The Nixon administration's decision making process of "Lam Son 719" and its failure, 1970-1971
Author	手賀, 裕輔(Tega, Yūsuke)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2021
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.94, No.2 (2021. 2) ,p.249- 273
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	添谷芳秀教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20210228-0249

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ニクソン政権によるラオス侵攻作戦の決定とその失敗、一九七〇―一九七一年

手賀裕輔

はじめに
一　ラオス侵攻前の状況
（一）カンボジアへの戦線拡大
（二）反戦運動、議会の反戦立法、撤退の加速
（三）米国の和平イニシアチブ
二　ラオス侵攻作戦「ラムソン719」の決定過程
（一）ラオス侵攻作戦の決定過程
（二）ラオス侵攻作戦への反対論
（三）侵攻作戦の決定を促進した要因
三　ラオス侵攻作戦の失敗とその原因
（一）ラオス侵攻作戦の失敗
（二）ラオス侵攻作戦が失敗した原因
（三）希望的観測によって歪んだ意思決定
おわりに

はじめに

一九七一年二月、ニクソン（Richard Nixon）大統領はベトナム共和国（南ベトナム）軍によるラオス侵攻作戦の実施を決断した。いわゆる「ラムソン７１９」作戦である。米軍の支援を受けた南ベトナム軍が、ベトナム民主共和国（北ベトナム）の補給路ホーチミン・ルートの中枢であるラオス領チェポンを攻撃した。しかし、北ベトナム軍の激しい反撃に直面した南ベトナム軍が早期撤退を行ったことで、作戦はあえなく失敗に終わった。

一九六九年の政権発足以来、ベトナム戦争に「名誉ある和平」をもたらすことを最優先課題としてきたニクソン政権であるが、戦争終結の試みは難航していた。軍事的膠着状況の長期化、国内の反戦・厭戦世論の高まり、戦費増大による国際経済上の地位低下などを勘案すれば、早期の戦争終結が必要なことは明白であった。そのため、南ベトナム政府・軍を強化して責任を移譲し、米軍は段階的に撤退していく「ベトナム化」政策が開始された。しかし他方では、一九七〇年四月のカンボジア侵攻に続いて、本稿で取り上げるラオス侵攻に踏み切ったことで戦争はインドシナ全域へと拡大した。

ラオス侵攻は、ベトナム戦争終結過程における一つの転換点と位置づけられてきた。作戦の頓挫によってベトナム化政策の失敗が露呈し、和平交渉で北ベトナムに対して重要な譲歩を余儀なくされたと考えられてきたからである。その譲歩とは、米軍と北ベトナム軍の相互撤退要求を取り下げ、停戦後も北ベトナム軍が南ベトナムに残留することを黙認するというものであった[1]。

しかしその重要性にもかかわらず、ラオス侵攻がなぜ実行されたのか、その理由については必ずしも十分に検討されてこなかった。ほとんどの先行研究がラオス侵攻に言及はするが、その関心は作戦の失敗がその後の米国の政策や交渉姿勢に及ぼした影響を解明することか[2]、もしくは作戦の軍事的側面を詳かにすることに集中してい

る。[3] それでも大半の先行研究が、ニクソン政権がラオス侵攻を決定したのは、北ベトナムの兵站線を断つことで戦況を改善し、ベトナム化のための時間稼ぎをしようとしたからだという点ではほぼ一致している。[4] 本稿も基本的にこの点に異を唱えるものではない。しかし、ラオス侵攻作戦は、前年のカンボジア侵攻によって生じた過剰介入や国内の反発などの問題をいっそう悪化させる危険性を孕んでいた。そればかりか、軍事的に多くの問題があることが再三にわたり指摘され、成功する見込みが高いとは決して言えなかった。

それにもかかわらず、ニクソンは南ベトナム軍によるラオス侵攻作戦を決断し、そして失敗した。なぜ、ニクソンは戦争終結を目指しながら、さらなる戦争拡大の道を選んだのであろうか。またなぜ、ニクソンは失敗の可能性の高い作戦を決行してしまったのであろうか。本稿は、ニクソン政権によるラオス侵攻作戦の決定過程を主として米国政府の一次資料に依拠して分析することで、その理由を解明することを目的とする。

以下第一節では、ラオス侵攻前にニクソン政権がどのような状況に直面していたのかについて記述する。そして第二節では、ラオス侵攻作戦の決定過程を追跡し、政権内に強い反対があったにもかかわらず、ニクソンが侵攻を決断した理由について説明する。最後に第三節では、ラオス侵攻が失敗した経緯とその原因について分析し、ニクソン政権の政策決定過程が希望的観測によって歪められていた事実を明らかにする。

一　ラオス侵攻前の状況

（一）カンボジアへの戦線拡大

一九七〇年四月、米・南ベトナム合同軍は、カンボジア東部の南ベトナムとの国境地帯に構築された北ベトナムと南ベトナム民族解放戦線（NLF）の軍事拠点「聖域」を攻撃した。カンボジア政変後、北ベトナムの攻勢

によってロン・ノル（Lon Nol）政府が崩壊の危機に陥ったためである。ニクソンは、「カンボジアの喪失」が南ベトナムの崩壊を、ひいては米国の超大国としての信頼性の失墜を招くことを恐れ、米地上軍による侵攻作戦を決断した。[5] その結果、ロン・ノル政府は生き延びた。また、米軍は北ベトナムとＮＬＦの兵站拠点の多くを破壊し、シハヌークヴィル港を掌握したことで、北ベトナムの補給活動を大きく混乱させた。[6] ニクソンは、共産主義勢力の活動は低下し、南ベトナム政府の統治・軍事能力の改善にとって望ましい環境をもたらした、と作戦の結果を自賛した。[7]

しかし同時に、ロン・ノル政府が生き延びたことで、米国は新たな問題を抱え込むことになった。北ベトナムは従来から聖域を中心にカンボジア東部を事実上支配していたが、シハヌーク（Norodom Sihanouk）放逐から侵攻作戦を経て、さらに支配地域を拡大した。対してロン・ノル政府の統治範囲は、プノンペンを含む南部と東南部のみという有様であった。[8] そのため、ニクソン政権は作戦終了後も北ベトナムのプノンペン攻撃を抑止し、聖域再建を阻止する手段として、南ベトナム軍がカンボジア領内で軍事活動を継続することを決定した。[9] 大きな犠牲を払ってまで守り抜いたカンボジアを失うわけにはいかなかったのである。[10]

（二）反戦運動、議会の反戦立法、撤退の加速

カンボジア侵攻は、長引く戦争に倦み疲れた米国社会から強い反発を招いた。戦争の拡大は、一時沈静化していた反戦運動を再燃させた。一九七〇年四月三〇日に侵攻が発表されると、全米各地の大学を中心に反戦運動が組織され、先鋭化した学生が警察や州兵と衝突する事件が頻発した。とくに五月四日、オハイオ州のケント州立大学で学生が州兵により射殺される事件が起きると、抗議運動は瞬く間に全国に広がった。[11] 数日後には、一〇万名を超える規模の抗議集会がワシントンで開催されるに至り、ホワイトハウスにも緊張が走った。[12]「誰も予想し

ていなかったほど大きな」[13]反戦運動のうねりは、ホールドマン（Harry R. Haldeman）首席補佐官によれば、政権首脳にとって強い心理的圧力となり、目には見えないものの、政策決定に大きな影響を及ぼした[14]。

民主党が多数派を占める連邦議会の反発は、より直接的な影響をニクソン政権の外交運営へ及ぼした。カンボジア侵攻によって、政府と議会の関係は決定的に悪化し、大統領の戦争権限を法的に制限する動きが見られるようになった。まず六月には、上院で一九六四年のトンキン湾決議が撤回された。その後、クーパー・チャーチ（Cooper-Church）修正が上院を通過し、下院で否決されたものの、後に修正されたかたちで一二月に成立した。これにより、カンボジアとラオスでの米軍地上部隊の活動と軍事支援が禁止された[15]。さらに、最終的には否決されたものの、米軍のインドシナからの撤退期限を設定し、それ以降の資金拠出を禁止したマクガヴァン・ハットフィールド（McGovern-Hatfield）修正も提出された[16]。同様の修正法案の提出はこれ以降も続き、もはやニクソン政権が議会の動向を無視してベトナム戦争を遂行することは不可能となった[17]。

カンボジア侵攻によって米軍撤退は加速した。侵攻前の四月二〇日、ニクソン政権は南ベトナムから一五万名を一年間かけて撤退させる第四次米軍撤退計画を発表した。しかし侵攻作戦の開始に伴い、北ベトナムに最大限の軍事的圧力を加えるべく撤退を中断したため、その駐留費用が軍事予算を圧迫した。これに対処すべく、レアード（Melvin Laird）国防長官は当初の計画を前倒しし、撤退を加速させることをニクソンに進言した[18]。軍部とNSC（国家安全保障会議）はレアードの撤退推進案に反発したが[19]、予算不足は如何ともし難く、ニクソンもレアードの進言を受け容れざるをえなかった[20]。

（三）米国の和平イニシアチブ

カンボジア侵攻終了後、ニクソン政権内部では、大きな代償を払ってロン・ノル政府を守り、北ベトナムの聖

域に打撃を与えた後に、どのようにして戦争終結を実現するかが検討された。七月二〇日、キッシンジャー（Henry Kissinger）大統領補佐官は今後のベトナム戦略について分析した覚書をニクソンへ提出した。それによれば、米国には二つのオプションが存在した。第一が交渉による解決である。これは、南ベトナムの政治的将来について、米軍撤退を取引材料として北ベトナムと交渉し、合意を形成することで戦争を終結させるというオプションであった。第二がベトナム化である。これは、北ベトナムとは一切交渉せず、米国は南ベトナムの強化計画の進展に合わせて米軍を撤退させ、南ベトナムの政治的将来は南北ベトナムに委ねるというオプションであった。[21]

結論としてキッシンジャーは、当面はベトナム化と交渉による解決を並行して追求する「中間の道」を継続することをニクソンに勧告する。しかし、一九七一年四月ごろまでには、どちらの道を選択するか決断する必要があった。もし交渉による解決へと舵を切るのであれば、北ベトナムとの取引材料とするに足る規模の米軍が南ベトナムに駐留していなければならなかった。しかし、一九七一年四月末には第四次米軍撤退が完了し、その後次期撤退が開始される予定であった。その時までには地上戦闘部隊の大半が撤退し、取引材料としての米軍撤退の価値が大幅に低下する恐れがあった。[22]

こうして一九七一年四月の分岐点に向け、ニクソン政権は「中間の道」を歩みつつ、戦争終結を目指して様々なイニシアチブを講じていく。まずは、カンボジア侵攻によって中断された秘密和平交渉の再開であった。九月七、二七日に、キッシンジャーは約五ヶ月ぶりに北ベトナムのスアン・トゥイ（Xuan Thuy）代表と会談した。焦点は、カンボジア侵攻後初となる会談で北ベトナムが交渉に前向きな姿勢を見せるか否かにあった。[23] しかしキッシンジャーの期待に反して、スアン・トゥイは米国の和平案を一蹴し、何ら譲歩する姿勢を示さなかった。[24] 続く九月二七日会談が「まったく非生産的なもの」に終わったことで、交渉は停止された。[25]

秘密和平交渉と並行して、ニクソン政権内ではインドシナ全域での現状凍結停戦案の策定が進められた。ベトナム特別研究グループを中心に検討が重ねられ、政権内で総意を得たこの停戦案は、停戦発効後は戦場に駐屯する部隊の移動を原則的に禁止するという内容であった[26]。これは、南ベトナム領内に停戦後も北ベトナム軍が残留することを事実上認めるものであり、米軍と北ベトナム軍の相互撤退を要求してきた従来の立場からの後退と見られる恐れがあった[27]。しかし、北ベトナムが撤退に同意する見込みが低い以上、交渉打開のためには、合意の可能性が少しでもある現状凍結停戦を提案する必要があった[28]。また、これはあくまでも暫定的な措置であり、最終的に北ベトナム軍を含むすべての外国軍部隊の撤退を求めることに変わりはなかった[29]。

一〇月七日、ニクソンは包括的和平案の一環として現状凍結停戦案を発表した。停戦案は米国内で大きな驚きをもって迎えられ、政府への大きな賞賛の声が上がった[30]。しかし、北ベトナムはこれを拒絶した。政権内でもこの時点で北ベトナムが停戦を受け入れる可能性は低いと見られていたため、それは驚きではなかった[31]。ただし、一時的に集まった国内の支持が再び批判に転じるのは時間の問題であり、ニクソンは閉塞した状況を打開する術を見出すことができずにいた。

二　ラオス侵攻作戦「ラムソン719」の決定過程

（一）ラオス侵攻作戦の決定過程

現状凍結停戦案が拒否されると、ニクソン政権は北ベトナムが一九七〇年一〇月から翌年四月まで続く乾季の間に大規模攻勢を仕掛けてくるか否かを注視した。北ベトナムはカンボジア侵攻後カンボジアやラオス南部の兵站基地の再建・強化に努めており、これが大攻勢に発展するかどうかで政権内では意見が分かれていた[32]。乾季に

入ってまもなく、カンボジアでは戦闘が再び激化し、北ベトナム軍の攻撃によりロン・ノル政府軍は窮地に陥った。ニクソンは、北ベトナムの攻撃がこのまま全面的な攻勢に発展すれば、ロン・ノル政府が崩壊し、カンボジア全土が聖域と化してしまうのではないかとの危惧を抱いた。(33)

一二月半ば、ニクソンはヘイグ（Alexander Haig）大統領副補佐官をカンボジアと南ベトナムへ派遣した。ベトナム軍事援助司令部（ＭＡＣＶ）のエイブラムズ（Creighton Abrams）司令官とともに南ベトナム軍によるカンボジア攻撃作戦を検討するためであった。しかし、ニクソンの指示はそれだけにとどまらなかった。ニクソンは北ベトナムの攻撃にただ受動的に対応するのではなく、「先制攻撃」によって主導権を握り、北ベトナムの攻勢能力を奪うべきだと考え、インドシナ全域での複合的な攻撃作戦計画の策定を軍部に求めたのである。(34)

エイブラムズはニクソンの要請に応え、カンボジア攻撃に加えて、一一月ごろから軍部内で密かに検討されてきたラオス南部への大規模な侵攻作戦を提案した。それは、米軍の砲撃・兵站・航空支援を伴う南ベトナム軍二個師団が、ラオス領チェポンを攻撃し、ホーチミン・ルートを遮断するというものであった。クーパー・チャーチ修正によって、米軍地上部隊はラオスでの作戦に参加することは禁止されたため、南ベトナム軍が作戦の主体とされた。こうして、ラオス侵攻はベトナム化政策のテスト・ケースの意味合いを付与されることになった。(35) 協議を終えたヘイグは、エイブラムズがこのラオス侵攻作戦を「これまでの戦争において最も重要な作戦」であり、戦争の帰趨を左右する「決定的なものになりうる」と断言したと本国へ報告した。(36)

ニクソンとキッシンジャーはすぐさまこのラオス侵攻作戦（暗号名「ラムソン７１９」）に同意した。ラオス侵攻作戦が即座に政権首脳の支持を得るに至った理由は、チェポンの地理的重要性にあった。チェポンは、ラオス南部に位置し、北ベトナムからラオス、カンボジアを経て南ベトナムへと至る、網の目のように張り巡らされたホーチミン・ルート(37)の結節点の役割を果たしていた。(38) そこは、北ベトナムから送り出されたほぼすべての軍需物

資と兵士が通過する要衝であった。前年のカンボジア侵攻により、北ベトナムはカンボジア領シハヌークヴィル港を失ったため、中国から同港を経由し、南ベトナムへと至る海上補給路シハヌーク・ルートを使用できなくなった。その結果、北ベトナムはほとんどすべての補給をホーチミン・ルートに依存せざるをえなくなり、チェポンを含むラオス南部の重要性はこれまで以上に増していた[39]。このチェポンを叩き、北ベトナムの兵站システムに致命的な打撃を与えることこそラオス侵攻の作戦目標であった。

(二) ラオス侵攻作戦への反対論

しかし、ラオス侵攻作戦に対しては、国務省を中心に政権内で強い反対が見られた。前年のカンボジア侵攻の愚を繰り返すべきではないというのがその主たる理由であった。まず、国務省が懸念したのは、ラオスの軍事的・政治的均衡が崩れることであった。北ベトナムがラオス侵攻をジュネーヴ協定違反と非難し、それを口実に公然と軍事活動を活発化させることは間違いなかった[40]。そうなれば、ラオス王国政府への援助に加え、タイ軍非正規部隊やモン族部隊の投入によって、これまで辛うじて保たれてきた軍事的均衡が崩壊することが予想された[41]。またスワンナ・プーマ（Souvanna Phouma）政権は、ラオス侵攻に同意すれば北ベトナム、ソ連、中国の支持を失い、反対すれば保守派のクーデターを招き、事態が不安定化する恐れがあった。同政権が崩壊すれば、ニクソン政権は再びカンボジア危機の際と同様に介入の是非を問われ、さらなる泥沼に引きずり込まれかねなかった[42]。

また、新たな軍事行動によって、カンボジア侵攻後に起きたような国内社会の反発に再び直面することを国務省は憂慮した。ラオス侵攻はたしかにクーパー・チャーチ修正に抵触してはいなかったが、政府の戦争拡大を非難する議会反戦派がこれを機にさらに批判を強め、大統領の権限をより強く拘束するための立法措置を講じることが予想された[43]。また、反戦運動では一九七〇年末ごろから従来のリベラル派に加え、ベトナム帰還兵を中心と

する抗議運動が注目を集めていた。実際にベトナム戦争を戦った経験を持つ兵士たちによる政府批判は、党派を超えた影響力を持つ可能性があった。[44] このように米国社会で戦争への反対が強まれば、それだけ北ベトナムに対する米国の交渉上の立場が弱まることも憂慮された。

さらに政策決定者の頭を悩ませたのが、情報漏洩であった。作戦の検討が最終段階を迎えていた一九七一年二月一日、ニューヨーク・タイムズ紙などが政府当局者からのリークに基づき、ラオス侵攻作戦がまもなく開始されると報道したのである。[45] この報道を受け、キッシンジャーは作戦開始を見合わせるべきかどうかニクソンと協議した。[46] ニクソンは急遽二月三日朝に予定されていたＮＳＣ会議を中止し、ミッチェル（John Mitchell）司法長官、コナリー（John Connally）財務長官、ホールドマン、キッシンジャーのみを召集し、作戦実行の可否について最終的な検討を行った。しかしニクソンの結論は変わらず、ラオス侵攻作戦の実行が命じられた。[47]

（三）侵攻作戦の決定を促進した要因

前年のカンボジア侵攻後多くの困難に直面し、政権内の反対や情報漏洩があったにもかかわらず、なぜニクソンはラオス侵攻作戦を断行し、戦争をさらに拡大したのであろうか。

ニクソンが武力行使の必要性を認識したのは、「カンボジアの喪失」を恐れたためであった。先述したように、乾季に入るとカンボジアでは戦闘が激化し、ロン・ノル政府は再び崩壊の危機に陥った。前年に米国はカンボジアが共産化すれば、ソ連とのグローバルな冷戦における米国の超大国としての信頼性が損なわれると判断し軍事介入した。一旦信頼性をかけて関与した以上、今回の危機でもロン・ノル政府の崩壊を何としてでも食い止めなければ、米国の信頼性は地に落ちてしまうと懸念された。[48]「カンボジアを失うつもりはない」と決意したニクソンは、ロン・ノル政府を助け、聖域再建を阻止するため、南ベトナム軍によるカンボジア攻撃作戦が必要だと判

断した。[49]

しかし、ニクソンはそこからさらに踏み込み、北ベトナムに対して「先制攻撃」を仕掛けるべく、より大規模な南ベトナム軍によるラオス侵攻作戦にも踏み切った。ニクソンは、将来の北ベトナムによる大攻勢の芽を事前に摘み取り、南ベトナムの生存を維持したかたちでの「名誉ある和平」を実現するためには、北ベトナムの攻撃に受動的に対応するのではなく、先制攻撃に打って出なければならないと考えた。[50]たとえ北ベトナムが一九七一年の乾季に攻勢を実施しなくとも、いずれ大攻勢を発動することは必至であった。他方で従来の計画では、一九七二年後半には南ベトナム駐留米軍は一〇万名以下まで削減される予定であった。[51]こうした事態を前に、ニクソンは兵站システムの中枢へ予想外の攻撃を加えることで、北ベトナムの攻勢能力を破壊し、継戦意思を挫くことを企図した。これによって、南ベトナムへの脅威は大幅に低下し、一〇月の大統領選挙で再選を目指す南ベトナムのティエウ（Nguyen Van Thieu）大統領にとっても追い風となるはずであった。[52]そしてニクソンにとっても、再選がかかる米大統領選挙が行われる一九七二年に、南ベトナムが大規模攻勢を受け、崩壊するという最悪のシナリオを避けることは重要であった。[53]

とは言え、ラオス侵攻は様々な問題を引き起こしかねない上に、軍事情報が相手側に漏れており、通常であれば中止されてもおかしくはなかった。それでもこのタイミングでラオス侵攻が実行された背景には、時間的制約という要因が大きく作用していた。先述したように、ニクソン政権は第四次米軍撤退が完了する一九七一年四月までに、交渉かベトナム化のどちらによって戦争を終結させるのかを選択しなければならなかった。交渉による解決への誘因を北ベトナムへ与えるにせよ、またベトナム化を円滑に進め、撤退を成功させるにせよ、このタイミングで北ベトナムの攻勢能力を奪っておくことは重要であった。[54]

そして、一九七一年の春は米軍が南ベトナム軍による対外的な攻撃作戦を支援することができる最後の機会で

もあった。予算と戦力構成の面から見て、第四次撤退完了後に米軍が南ベトナム軍の攻撃作戦へ砲撃・兵站支援を供与することは難しくなることが予想された。そのため、この時を逃せば、北ベトナムに対して攻勢に打って出る機会は永久に失われてしまうと考えられた[55]。しかし逆に、このタイミングで兵站システムの中枢チェポンを攻撃すれば、「やつら〔北ベトナム〕を切り裂き、とどめを刺す」[56]ことができると考えられた。そうなれば、北ベトナムが停戦を受け入れ、一〇月の南ベトナム大統領選挙へ向けて闘争の場を戦場から政治的領域へと変化させる可能性も十分にあると見られた[57]。このようにラオス侵攻によって戦争に決定的転換をもたらすことが期待され、その利益は国務省の反対論で示されたデメリットを上回ると判断されたと考えられる[58]。

三　ラオス侵攻作戦の失敗とその原因

（一）ラオス侵攻作戦の失敗

一九七一年二月八日、南ベトナム軍はラオス国境を越え、チェポンへ向けて進軍を開始した。越境後北ベトナム軍との交戦らしい交戦もなく、南ベトナム軍は順調に西進した。北ベトナムはラオス侵攻作戦を事前に察知してはいたが、その正確なタイミングと場所までは把握しておらず、当初の反応は迅速なものではなかった[59]。

しかし二月一一日、南ベトナム軍は国境とチェポンの中間で突如進軍を停止する。ニクソンとキッシンジャーはこれを訝しんだが、エイブラムズによれば、悪路や悪天候に加え、安全確保のために慎重に行軍した結果であり、まもなく西進は再開されるはずであった[60]。しかしその気配は一向に見られず、この間に迎撃態勢を整えた北ベトナム軍による攻撃が始まった。予測ではその数は一万四〇〇〇名程度と見られていたが、実際にはその二倍にあたる二万八〇〇〇名に上った。対する南ベトナム軍はわずか一万であり、北ベトナム軍の猛攻を受け、大き

な犠牲を強いられた[61]。最終的に南ベトナム軍は一万七〇〇〇名まで増強されるも、北ベトナム軍も六万名以上を投入したため、苦戦を余儀なくされた[62]。

米国内ではメディアが連日南ベトナム軍の苦戦を報じる一方で[63]、軍部は楽観的な戦況報告を本国へ送り続けた[64]。焦燥感を募らせたニクソンとキッシンジャーは、三月一日にバンカー（Ellsworth Bunker）駐南ベトナム大使へ早急にエイブラムズと協議し、正確な戦況を報告するよう求めた[65]。これに対しバンカーは、北ベトナム軍はチェポンが重要拠点であるからこそ猛反撃を見せているのであり、苦戦は想定の範囲内であるとキッシンジャーを宥めた。そして、当初の方針を堅持すれば、最終的に北ベトナムに大打撃を与えることができると主張した[66]。

しかし実際には、二月末の時点でティエウはラオス侵攻作戦の目的を放棄していた。三月七日、南ベトナム軍はようやく西進を再開し、チェポンを奪取するが、わずか二日半占拠した後即座に撤退する[67]。チェポンはホーチミン・ルートの要衝であるが、この街のみをしかも短期間占拠することにそれほど意味はない。重要なのは、チェポンを中心とした地域一帯を長期にわたり占拠した上で、北ベトナム軍の補給路を遮断し、兵站基地や貯蔵物資、兵器を破壊することにあった。しかし、一〇月に大統領選挙を控えるティエウは、南ベトナム軍に大きな犠牲が出ることを嫌った。これ以上の犠牲を避けると同時に米国の要求を満たすため、ティエウは形だけのチェポン占拠という行動に出たと考えられる[68]。

三月九日、エイブラムズから南ベトナムがラオスからの早期撤退を検討しているとの報せがもたらされる。恐慌を来たしたキッシンジャーは、南ベトナム軍が作戦途中で撤退することに強く反対し、是が非でも四月末まで作戦を継続するようティエウに求めた[69]。しかし、南ベトナム軍の撤退を押しとどめることはできなかった。三月一八日、米国の要請を無視した撤退に激怒したキッシンジャーは、ティエウが軽率な行動によってニクソンの信頼を失うべきではなく、これが米軍が大規模な支援を行える最後の機会だということを十分に理解するよう警告

した。[70] だが、もはや南ベトナム軍に作戦継続の意思は残っていなかった。[71]

兵力面で圧倒的に不利な状況での交戦しながらの撤退は、熾烈を極めた。南ベトナム軍は北ベトナム軍による徹底的な包囲殲滅作戦を逃れ、米軍の集中的な航空支援によって辛うじて撤退を完了し帰国した。ラムソン719作戦は南ベトナム軍に死傷者、行方不明者合わせて約七五〇〇名の犠牲を出し、終了した。[72]

（二）ラオス侵攻作戦が失敗した原因

ラオス侵攻作戦は失敗に終わった。それでも四月七日の国民向け演説でニクソンは、ラオス侵攻は成功したと強弁した。[73] 米軍部も、北ベトナムの兵站基地と補給路を破壊し、浸透活動を混乱させることができたとその成果を誇った。北ベトナム軍の死傷者は一万四五〇〇名以上に上り、大量の軍需物資を捕獲した。一九七一年乾季の北ベトナムによる大攻勢も阻止した。[74] しかし作戦目的は、あくまでも兵站システムの中枢を破壊して攻勢能力に打撃を与え、北ベトナムの継戦意思を奪うことであった。この基準に則れば、キッシンジャーも認めたように、作戦は「明らかに成功ではなかった」。[75]

ラオス侵攻作戦が失敗した第一の原因は、南ベトナム軍の能力不足であった。南ベトナム軍には、不慣れな地形で複雑な攻撃作戦を米軍顧問なしで実行する能力はなかった。当時メディアが報じたように、南ベトナム軍はなす術なくパニックに陥り、ただ逃げ帰ったわけではなかった。なかには善戦した部隊も数多く存在し、ベトナム化政策は一定の成果を上げていた。しかし、強化はいまだ不十分であり、とりわけ司令官の能力・経験不足は明らかであった。[76]

第二の原因は、情報収集・分析の失敗であった。米軍部はチェポン一帯の北ベトナム軍の戦力を一万四〇〇〇名程度と推測していた。[77] また、北ベトナム軍は機動力を欠くため、大規模な戦力の増強はできないと考えられて

いた。[78] しかし実際には、北ベトナム軍は次々に部隊を増強し、最終的に六万名以上を投入した。対する南ベトナム軍は最大で一万七〇〇〇名にすぎず、苦戦を強いられた。

第三の原因は、米国と南ベトナムの認識の齟齬であった。北ベトナムの兵站システムを破壊することの重要性について、両国は一致していた。しかし、米国がベトナム戦争の帰趨を左右しうる作戦としてラオス侵攻の完遂を最優先したのに対し、ティエウは一〇月に大統領選挙を控え、南ベトナム軍に深刻な被害が出ることを恐れていたと考えられる。[79] キッシンジャーによれば、そのリスクを避けるため、南ベトナム軍の死傷者が三〇〇〇名を超えた場合には即時撤退するよう事前に指示が出されていたという。[80]

（三）希望的観測によって歪んだ意思決定

失敗をもたらした要因は、実はいずれも作戦の検討段階で指摘されていたことばかりであった。南ベトナム軍の能力不足については、キッシンジャーが最もよく理解していたはずである。これまで、ベトナム化政策の進捗について政権内で最も懐疑的であったのが、他ならぬキッシンジャーだったからである。[81] また、軍部では例外的に、陸軍参謀総長ウェストモーランド（William Westmoreland）が疑義を呈した。前ＭＡＣＶ司令官であり、在任中に繰り返し米軍によるラオス侵攻の必要性を主張したが、いずれも却下された過去を持つウェストモーランドは、[82] エイブラムズが立案した作戦の軍事的妥当性を疑問視し、南ベトナム軍には単独での作戦遂行能力は備わっていないと警告していた。[83]

また、北ベトナム軍の戦力評価については、中央情報局（ＣＩＡ）が一貫して警鐘を鳴らしていた。ＣＩＡの分析では、北ベトナムが攻撃作戦を予測して、チェポン一帯に大規模な兵力を配備しており、徹底的に抗戦してくることは確実であると見られていた。[84] しかし、軍部の楽観的評価が修正されることはなかった。

そして、南ベトナムの侵攻作戦に対する姿勢についても、ティエウから一月にサイゴンを訪問したレアードを通じて、米国政府へ作戦期間を五～八週間に限定したい旨が伝えられていた。[85] このティエウの判断の背景には、米国への不信があったと考えられる。南ベトナムから見れば、従来の立場を軟化させて現状凍結停戦案を提示し、米軍撤退を加速するばかりか、国外での軍事作戦の負担を一方的に強いる米国の行動は不満と不安を惹起させるものであった。最終的に米国が頼りにならない可能性がある以上、唯一の頼みの綱である南ベトナム軍の犠牲を抑えたいとティエウが考えたとしても無理はなかった。[86] しかし、ニクソンとキッシンジャーは、北ベトナムの兵站システムを徹底的に破壊するためには作戦期間を限定することは賢明でないとその要望を一蹴した。[87]

ラオス侵攻作戦の決定過程を仔細に検討することで明らかになるのは、ニクソン政権の意思決定が、希望的観測によって大きく歪められていたという事実である。[88] 前節で論じたニクソンによるラオス侵攻の決定は、侵攻作戦が成功することを暗黙の前提としていた。しかし実際には、「ラムソン７１９」作戦には多くの軍事的欠陥があり、その成功は疑問視されていた。それにもかかわらず、ニクソンとキッシンジャーは軍部の楽観的評価を鵜呑みにし、積極的に作戦を推進するという不可解な行動をとった。[89] それはいったいなぜだろうか。

ニクソンは北ベトナムの攻勢能力に打撃を与え、継戦意思を挫くことで「名誉ある和平」の実現を可能にする軍事作戦を強く求めていた。このニクソンの強い意向を汲んで軍部が提案したのが、南ベトナム軍によるラオス侵攻作戦であった。[90] ニクソンはこのラオス侵攻作戦こそ、戦争に決定的転換をもたらすという自らの願望を叶えるものと考え、実際以上に作戦が成功する可能性を高く認識し、問題点を過小評価した。[91]

軍部が立案した作戦計画は、ニクソンが望むとおり作戦が成功するとの結論がまずあり、その結論を正当化するために情報が歪曲された。本来、ある政策が成功することが望ましいということと、ある政策が成功する可能性が高いということは、まったく別である。ところが、ラオス侵攻の決定過程では、両者が混同され、希望的観

測によって客観的分析が歪められた。軍部がニクソンの願望に沿った都合の良い情報のみを提供したことで、ニクソンの希望的観測はさらに強まるという悪循環が生じた。その結果、南ベトナム軍は、ベトナム化政策によって単独での作戦遂行能力を備えるまでに強化され、南ベトナム政府も米国と目的を完全に共有し、積極的に協力する意思を持っている一方で、北ベトナム軍の戦力は小規模で、増強する能力もないとの誤った認識が形成され、それをもとに作戦の検討が進められた。[92]

ラオス侵攻の決定過程では、先述したように、軍部の計画に多くの疑問が投げかけられた。しかし、ニクソンの希望的観測と相容れない批判は顧みられず、根拠は曖昧だが、希望的観測に合致する軍部の楽観論が容れられ、決定が下された。[93] ニクソンは、自分が見たいと思うものしか見ず、自分が望んでいることは実現する可能性も高いと認識する誤りを犯したのである。しかしラオス侵攻の失敗により、これらの前提はいずれも根拠の乏しい希望的観測にすぎなかったことが明らかになった。

おわりに

一九七一年二月、ニクソンは南ベトナム軍によるラオス侵攻作戦の実施を決断した。そのきっかけになったのは、カンボジア危機の再来であった。カンボジアでは、北ベトナム軍の攻撃によってロン・ノル政府が窮地に陥り、聖域が再建される恐れが生じた。「カンボジアの喪失」とそれに伴う超大国としての信頼性の低下を恐れたニクソンは、カンボジアでの軍事行動の必要性を認識する。そして、ニクソンはそこからさらに踏み込み、より大規模な南ベトナム軍によるラオス侵攻作戦を同時に実施することを決定した。

ラオス侵攻については政権内から異論が噴出した。ラオス侵攻によって、前年のカンボジア侵攻の場合と同様

に、国内の反戦運動や議会による反戦立法の動きが再燃することが予測されたし、ラオスが不安定化し、さらなる介入を迫られることも懸念されたからである。

しかしニクソンは反対論を退け、ラオス侵攻を決断した。戦争終結を目指しながら、戦争拡大を選択したのである。それは、なぜだろうか。第一に、ニクソンは将来の北ベトナムによる大攻勢の芽を摘み、南ベトナムの生存を守るためには、受動的に対応するのではなく、先制攻撃に打って出なければならないと考えた。シハヌーク・ルートの遮断により重要性が増したホーチミン・ルートの中枢チェポンは、北ベトナムの継戦意思と能力を断つことを狙うニクソンにとって、格好の攻撃対象であった。兵站線を断てば、北ベトナムが停戦を受け入れる可能性も高まると期待された。

第二に、時間的制約が二つの意味でニクソンの決定を規定した。まず、ニクソン政権は第四次米軍撤退が完了する一九七一年四月までに、戦争終結へ向けて交渉かベトナム化のどちらの戦略を選ぶべきか決断を迫られていた。いずれを選ぶにせよ、期限までに何らかの行動を起こさねばならなかった。そして一九七一年春は、米軍が戦力的にも、予算的にも南ベトナム軍の攻撃作戦へ十分な砲撃・兵站支援を行える最後の機会でもあった。これを逃せば、そのような機会は二度と訪れることはないと考えられた。

しかし、ニクソンの強い期待にもかかわらず、作戦は失敗に終わる。ここで注目すべきは、南ベトナム軍の能力不足、北ベトナム軍の戦力の過小評価、南ベトナムの意図の誤認といった作戦失敗の原因が、いずれも検討段階で指摘されていた事実である。それにもかかわらず、ニクソンはラオス侵攻を実施するという誤った決定を下した。

ニクソンの失敗の根底には、希望的観測に基づく過信があった。作戦を実施した場合に生じるデメリットについての検討は重ねられたが、作戦自体が成功するかどうかについては軍部の楽観論が無批判に受け容れられ、い

つの間にか作戦が成功することを前提として、計画の策定が進められた。ニクソンの願望と合致しない情報や批判が顧みられることは決してなく、反対する人物は政策決定過程から排除された。願望と事実が混同され、誤った決定が下された。

ラオス侵攻作戦の失敗後、ニクソン政権は和平交渉において北ベトナムに対する相互撤退要求の放棄を余儀なくされた。これは大きな後退であった。しかし、これでニクソンが「名誉ある和平」の実現を諦めたわけではなかった。ちょうど時を同じくして大きな進展が見られた米中和解がもたらす成果に、ニクソンは大きな期待を寄せていたのである。一九七一年四月、ニクソンのもとへ中国から大統領特使の中国訪問を受け入れる旨のメッセージが届けられ、七月にはキッシンジャーの秘密訪中が実現する[94]。ニクソンは米中和解を要とする米中ソ三角外交を操作して北ベトナムと中国、ソ連を離間させると同時に、外交的、軍事的圧力をかけることで「名誉ある和平」の実現を追求していく[95]。

（1） Jeffrey Kimball, *Nixon's Vietnam War*, Lawrence: University Press of Kansas, 1998, pp.241–248; Larry Berman, *No Peace, No Honor: Nixon, Kissinger, and Betrayal in Vietnam*, New York: A Touchstone Book, 2001, pp.107–111.

（2） 手賀裕輔「ニクソン政権のベトナム政策と対中接近―軍事的二極と政治的多極の相剋、一九七〇―一九七一」『国際安全保障』第三八巻第一号、二〇一〇年、一―一九頁、Lien-Hang T. Nguyen, *Hanoi's War: An International History of the War for Peace in Vietnam*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2012, pp.207–219.

（3） James H. Willbanks, *A Raid too Far: Operation Lam Son 719 and Vietnamization in Laos*, College Station: Texas A&M University Press, 2014; Robert D. Sander, *Invasion of Laos, 1971: Lam Son 719*, Norman: University of Oklahoma Press, 2014.

（4） David F. Schmitz, *Richard Nixon and the Vietnam War: The End of the American Century*, Lanham: Rowman & Littlefield, 2014, pp.110–135; Robert K. Brigham, *Reckless: Henry Kissinger and the Tragedy of Vietnam*, New

York: Public Affairs, 2018, pp.147–159.

（5） 手賀裕輔「ニクソン政権のカンボジア侵攻決定過程（一九七〇）―信頼性のための侵攻」『法学政治学論究』第八五号、二〇一〇年、二九―六〇頁。

（6） *Foreign Relations of the United States, 1969–1976* [*FRUS*], vol.7, Washington, D.C.: USGPO, 2010, doc.42.

（7） *Public Papers of the Presidents: Nixon* [*PPP*], *1970*, Washington, D.C.: USGPO, 1971, doc.205.

（8） CIA, SNIE, 57–70, "The Outlook for Cambodia," 8/6/70, CIA, *FOIA Electronic Reading Room, the Vietnam Collection*, https://www.cia.gov/library/readingroom/document/0001166468 (accessed 2/9/2021)

（9） Memcon, Nixon, Laird, and Kissinger, et al., 5/31/70, Box 146, National Security Council Files [NSCF], Nixon Presidential Materials [NPM], The National ArchivesⅡ, College Park, Maryland [NA].

（10） *FRUS,* vol.6, Washington, D.C.: USGPO, 2006, doc.326.

（11） *The New York Times* [*NYT*], 5/5/70, p.1.

（12） Melvin Small, *Johnson, Nixon, and the Doves*, New Brunswick: Rutgers University Press, 1988, pp.201–208.

（13） Telecon, Kissinger and Rogers, 5/7/70, KA02862, *The Kissinger Telephone Conversations* [*KTC*], Digital National Security Archive [DNSA].

（14） H.R. Haldeman, *Haldeman Diaries; Inside the White House*, New York: G.P. Putnam, 1994, pp.158–164.

（15） LeRoy Ashby and Rod Gramer, *Fighting the Odds: The Life of Senator Frank Church*, Pullman: Washington State University Press, 1994, pp.307–340.

（16） Thomas J. Knock, "'Come Home, America': The Story of George McGovern," Randall B. Woods, ed., *Vietnam and the American Political Tradition: The Politics of Dissent*, Cambridge: Cambridge University Press, 2003, pp.110–117.

（17） 水本義彦「ニクソン政権のベトナム政策とアメリカ連邦議会、一九六九―一九七三年」『獨協大学英語研究』第八一号、二〇二〇年、一三―一七頁。

（18） Laird to Kissinger, "Southeast Asia Redeployment," 8/20/70, Box 95, NSCF, NPM, NA.

(19) Kissinger to Nixon, "Southeast Asia Redeployment," 8/27/70, Box 95, NSCF, NPM, NA.
(20) Kissinger to Nixon, "Announcement of Expedited Troop Withdrawals from Vietnam for Inclusion in the Presentation to the East Coast Editors, Monday, October 12, 1970," 10/11/70, Box 95, NSCF, NPM, NA.
(21) Kissinger to Nixon, "Alternative Vietnam Strategies," 7/20/70, Box 861, NSCF, NPM, NA.
(22) Ibid.
(23) Kissinger to Nixon, "My September 7 Meeting with the North Vietnamese," 9/1/70, Box 853, NSCF, NPM, NA.
(24) Memcon, Kissinger and Xuan Thuy, et al., 9/7/70, Box 853, NSCF, NPM, NA.
(25) Kissinger to Nixon, "My September 27 Meeting with the North Vietnamese," 9/28/70; Memcon, Kissinger and Xuan Thuy, et al., 9/27/70, both in Box 853, NSCF, NPM, NA.
(26) VSSG, Conclusion of the Vietnam Special Studies Group Paper on a Cease-Fire Option, n.d., Box 118, NSCF, NPM, NA.
(27) Kissinger to Nixon, "Instruction to Ambassador Bunker Regarding the Vietnam Negotiating Package," 9/12/70, Box 124, NSCF, NPM, NA.
(28) Henry Kissinger, *White House Years* [*WHY*], New York: Simon & Schuster, 2011 (1979), pp.1211–1213.
(29) *PPP: Nixon, 1970*, doc.337.
(30) *The Washington Post*, 10/9/70, p.A20.
(31) *FRUS*, vol.6, doc.348.
(32) *FRUS*, vol.7, doc.63.
(33) Telecon, Nixon and Kissinger, 12/9/70, KA04461, *KTC*, DNSA.
(34) *FRUS*, vol.7, doc.87.
(35) Kissinger to Nixon, "Assessment by General Abrams," 3/22/71, Box 153, NSCF, NPM, NA.
(36) Backchannel Message, Haig to Kissinger, 12/15/70, Box 1011, NSCF, NPM, NA.

(37) 福田忠弘「ベトナム南北分断以降の南北ベトナム間の移動および補給ルートについて―ダンフォン『五つのホーチミンルート』を中心に」『研究年報』第四三号、二〇一一年、八五―九七頁。
(38) *FRUS*, vol.7, doc.105.
(39) *FRUS*, vol.7, doc.59.
(40) Minutes of a Meeting of the WSAG, "Laos," 1/21/71, Box H115, National Security Council Institutional Files [NSCIF], NPM, NA.
(41) ベトナム戦争期の米国のラオス政策については、水本義彦「ヴェトナム和平協定とラオス、一九六九―一九七三―キッシンジャー＝レ・ドク・ト交渉を中心に」『国際政経』第一六号、二〇一〇年、四七―七二頁、寺地功次「ラオス内戦とアメリカ」(1)、(2)、(3)『共立国際研究』第三一、三三、三四号、二〇一五、一六、一七年、七九―一一五、四七―八四、一〇七―一四八頁。
(42) Kissinger to Nixon, "CIA Analysis of Probable Reactions of Various Concerned Parties to Operations in Laos," 1/26/71, Box 976, NSCF, NPM, NA.
(43) Andrew L. Johns, *Vietnam's Second Front: Domestic Politics, the Republican Party, and the War*, Lexington: The University Press of Kentucky, 2010, pp.290–293.
(44) 藤本博『ヴェトナム戦争研究―「アメリカの戦争」の実相と戦争の克服』法律文化社、二〇一四年、一一〇―一六三頁。
(45) *NYT*, 2/1/71, p.1.
(46) Kissinger to Nixon, "Disclosure of Operation in Southern Laos," 2/2/71, Box 83, NSCF, NPM, NA.
(47) Haldeman, *Haldeman Diaries*, pp.291–293.
(48) *FRUS*, vol.6, doc.326.
(49) Telecon, Nixon and Kissinger, 12/9/70, KA04461, *KTC*, DNSA.
(50) *FRUS*, vol.7, doc.96.
(51) Memcon, Laird and Thieu, 1/11/71, Box 83, NSCF, NPM, NA.

(52) Memcon, Thieu, Bunker, and Haig, 12/17/70, Box 1011, NSCF, NPM, NA.
(53) *FRUS*, vol.7, doc.103.
(54) Kissinger to Nixon, "Alternative Vietnam Strategies," 7/20/70, Box 861, NSCF, NPM, NA.
(55) Minutes of a Meeting of the Senior WSAG, "Southeast Asia Dry Season Campaign," 1/26/71, Box H115, NSCIF, NPM, NA.
(56) Telecon, Nixon and Kissinger, 12/19/70, KA04593, KTC, DNSA.
(57) Kissinger to Nixon, "Situation in the Countryside in Vietnam," 11/16/70, Box 150, NSCF, NPM, NA.
(58) *FRUS*, vol.7, doc.116.
(59) Willbanks, *A Raid too Far*, p.82.
(60) Kissinger to Nixon, "General Abrams' Report on Laos Operation," 2/14/71, Box 81, NSCF, NPM, NA.
(61) Minutes of NSC Meeting, "Laos," 2/26/71, Box H110, NSCIF, NPM, NA.
(62) The Military History Institute of Vietnam, *Victory in Vietnam: The Official History of the People's Army of Vietnam*, 1954–1975, Lawrence: University Press of Kansas, 2002, pp.272–275.
(63) *NYT*, 2/21/71, p.1.
(64) *FRUS*, vol.7, doc.134.
(65) *FRUS*, vol.7, doc.142.
(66) *FRUS*, vol.7, doc.143.
(67) Willbanks, *A Raid too Far*, pp.117–130.
(68) Memcon, Kissinger, Zais, and Haig, 3/22/71, Box 82, NSCF, NPM, NA.
(69) *FRUS*, vol.7, doc.147.
(70) Backchannel Message, Kissinger to Bunker, 3/18/71, Box 84, NSCF, NPM, NA.
(71) Backchannel Message, Haig to Kissinger, 3/19/71, Box 84, NSCF, NPM, NA.
(72) Graham A. Cosmas, *MACV: The Joint Command in the Years of Withdrawal,1968–1973*, Washington, D.C.:

Center of Military History, United States Army, 2006, p.335.

(73) *PPP: Nixon, 1971*, doc.135, Washington D.C.: USGPO, 1972.

(74) *FRUS*, vol.7, doc.164; Kissinger to Nixon, "Enemy Loss in Laotian Operation," n.d., Box 84, NSCF, NPM, NA.

(75) Haldeman, *Haldeman Diaries*, p.313.

(76) Keith William Nolan, *Into Laos: The Story of Dewey CanyonII/Lam Son 719, Vietnam 1971*, Novato: Presidio Press, 1986, pp.103–105.

(77) Minutes of a Meeting of the Senior WSAG, "Southeast Asia Dry Season Campaign," 2/4/71, Box H115, NSCIF, NPM, NA.

(78) *FRUS*, vol.7, doc.109.

(79) Telecon, Laird and Kissinger, 3/21/71, KA05250, KTC, DNSA.

(80) Kissinger, *WHY*, p.1250.

(81) Kissinger to Nixon, "Vietnam Options," 9/11/69, Box H024, NSCIF, NPM, NA.

(82) William C. Westmoreland, *A Soldier Reports*, New York: Doubleday, 1976, p.272.

(83) Richard A. Hunt, *Melvin Laird and the Foundation of the Post-Vietnam Military, 1969–1973*, Washington, D.C.: Historical Office, Office of the Secretary of Defense, 2015, pp.176–177.

(84) Kissinger to Nixon, "CIA Analysis of Probable Reactions of Various Concerned Parties to Operations in Laos," 1/26/71, Box 976, NSCF, NPM, NA.

(85) Telecon, Laird and Kissinger, 2/21/71, KA05250, KTC, DNSA.

(86) Memcon, Thieu, Bunker, and Haig, 12/17/70, Box 1011, NSCF, NPM, NA.

(87) Willard J. Webb and Walter S. Poole, *The Joint Chiefs of Staff and the War in Vietnam, 1971–1973*, Washington, D.C.: Office of Joint History, Office of the Chairman of the Joint Chiefs of Staff, 2007, p.5.

(88) Jack S. Levy, "Psychology and Foreign Policy Decision-Making," Leonie Huddy, et al., eds., *The Oxford Handbook of Political Psychology*, Oxford: Oxford University Press, 2013, pp.301–333.

(89) *FRUS*, vol.7, doc.104; Haldeman, *Haldeman Diaries*, pp.287–288.
(90) Backchannel Message, Haig to Kissinger, 12/15/70, Box 1011, NSCF, NPM, NA.
(91) *FRUS*, vol.7, doc.104.
(92) Kissinger, *WHY*, p.1253; *FRUS*, vol.7, doc.109.
(93) *FRUS*, vol.7, doc.112; Conversation, Nixon and Kissinger, 2/18/71, No. 451–23, White House Tapes, Nixon Presidential Library, Yorba Linda, California.
(94) Message, Zhou Enlai to Nixon, 4/21/71, Box 1031, NSCF NPM, NA.
(95) 手賀裕輔「米中ソ三角外交とベトナム和平交渉、一九七一―一九七三―「名誉ある和平」と「適当な期間」の狭間で」『国際政治』第一六八号、二〇一二年、一一七―一三〇頁。

〔付記〕本研究は科研費（課題番号17K13691）および二松学舎大学特別研究員制度の助成を受けたものである。